

スナフ

一節一のく行を街金黄一

た。
妻のきく子は一向に落つかぬ大澤の容子に不満だった。忙がしいのは事業家の常だとは云ふやうなものゝ、脱殻のやうな家庭に居る淋しさをつくぐくと訴へた。

『もう少しの辛抱だ、いまに安心させるよ』

大澤は辯解のやうな、慰めるやうなことを云つて、訴へる妻の言葉を一々點頭いて居た。

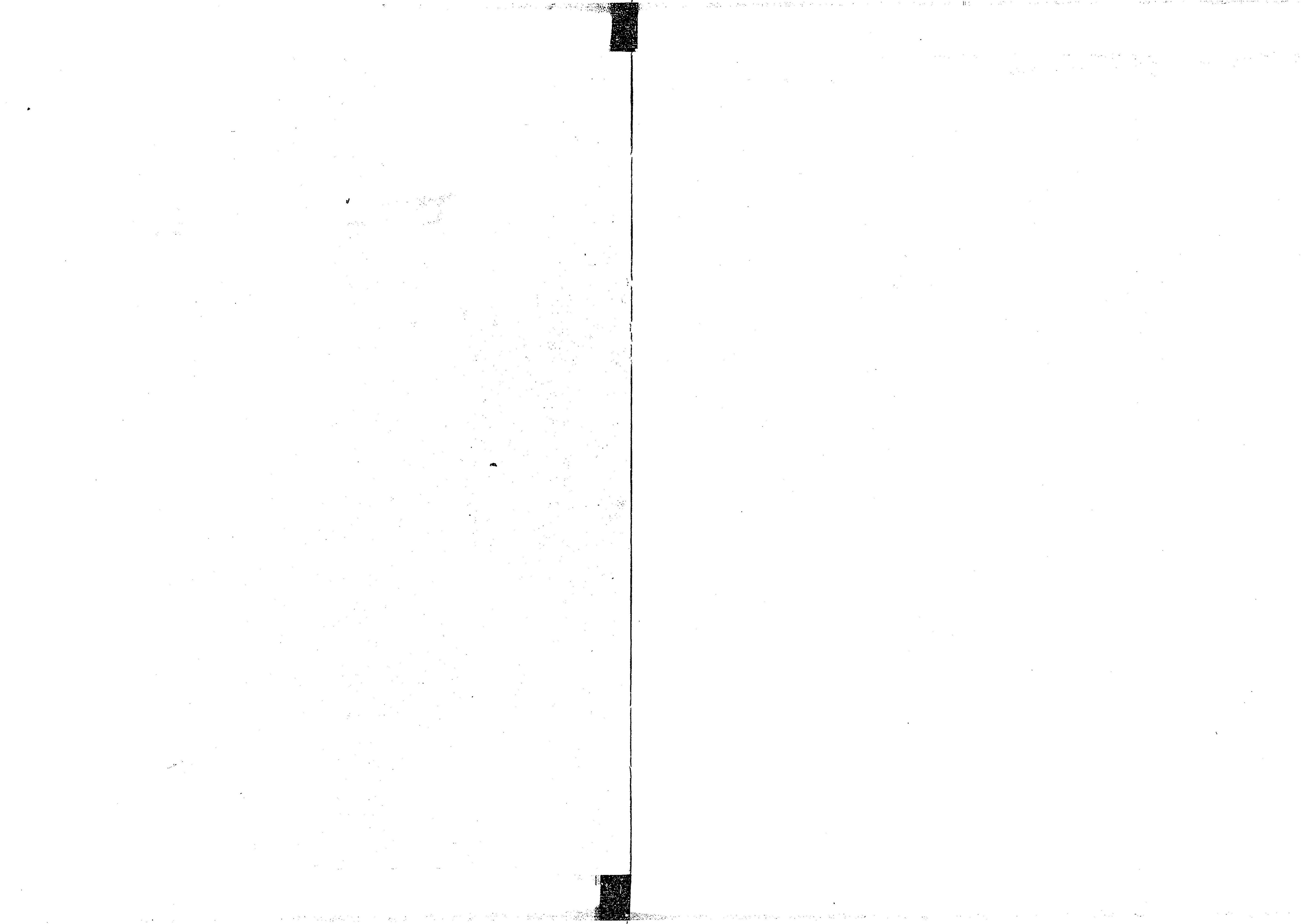
その翌日、朝の特急で彼は神戸へ行つた。神戸のS旅館には近藤倉太郎と、發明家の井上不二也とが待つて居た。

『私は大澤善八です、何分よろしく』

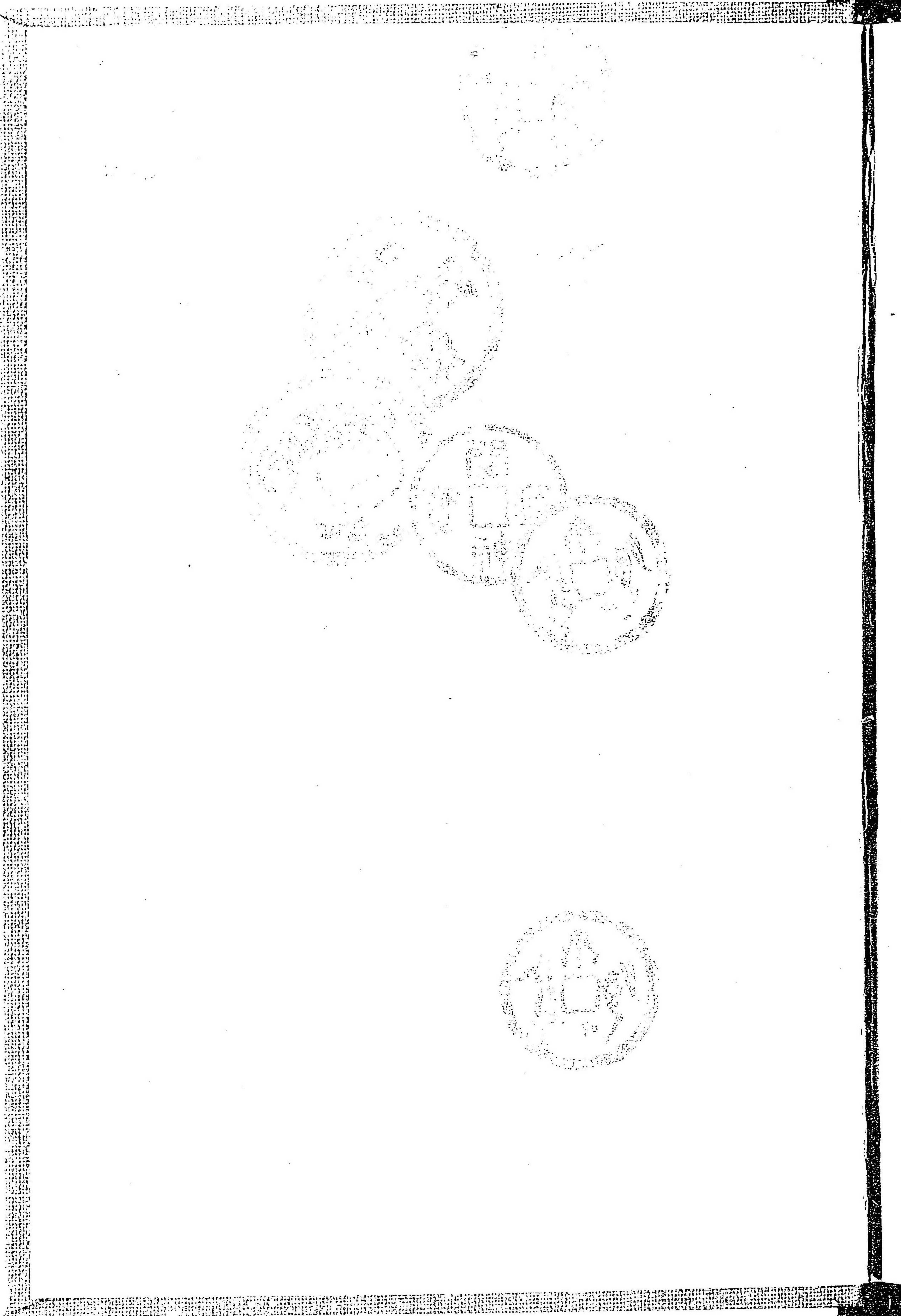
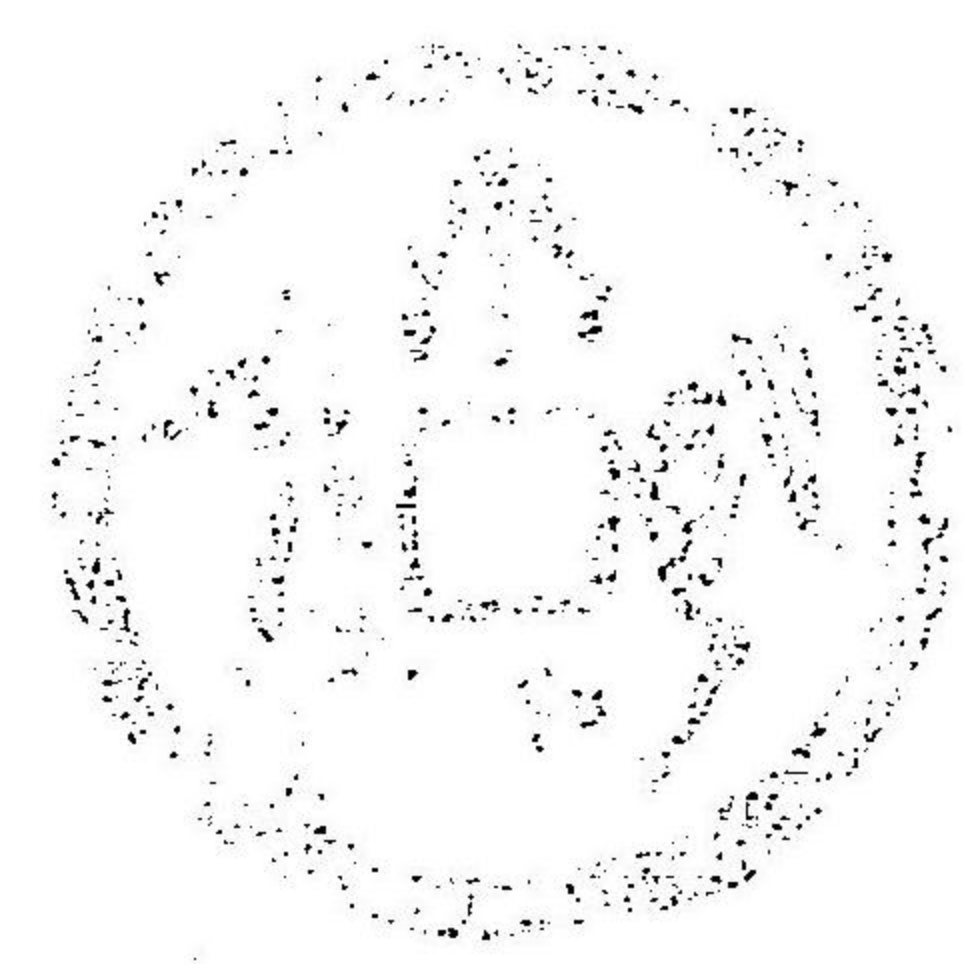
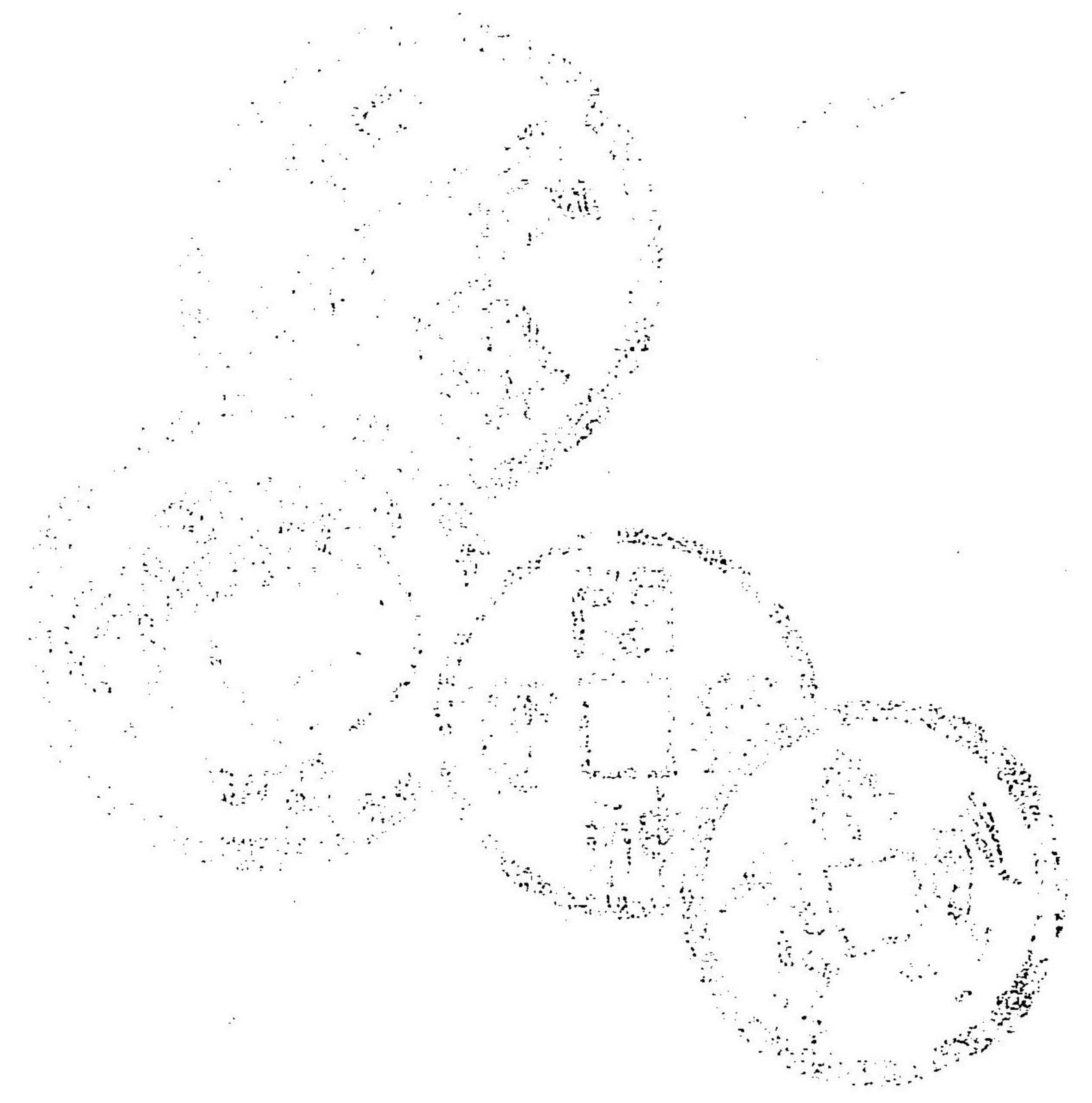
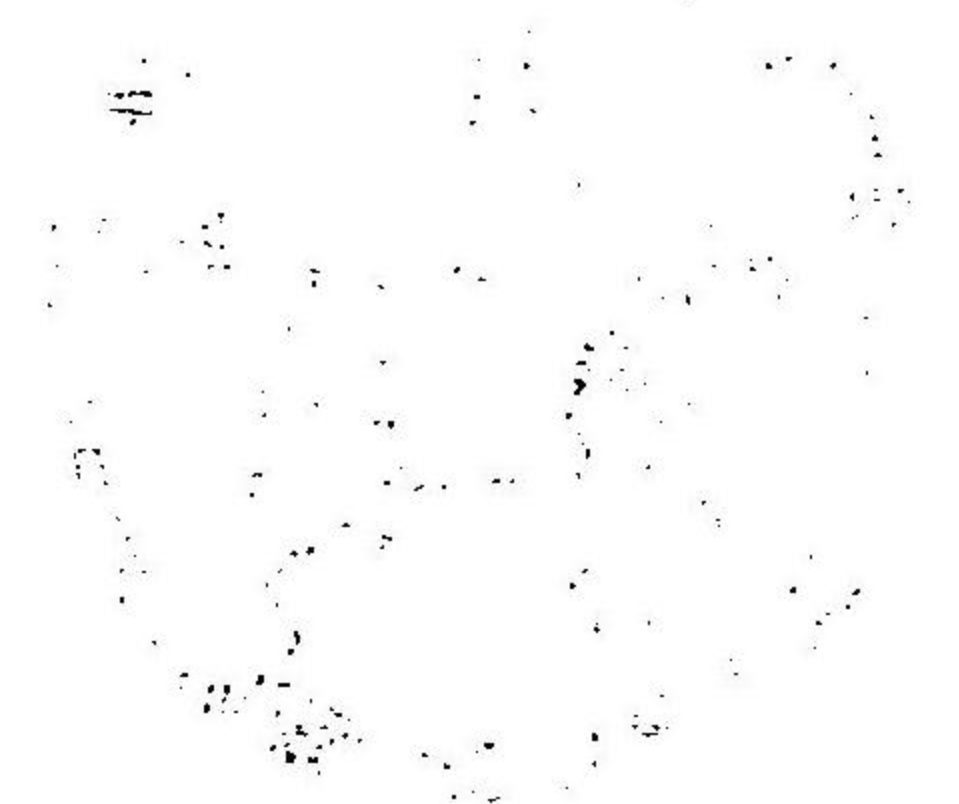
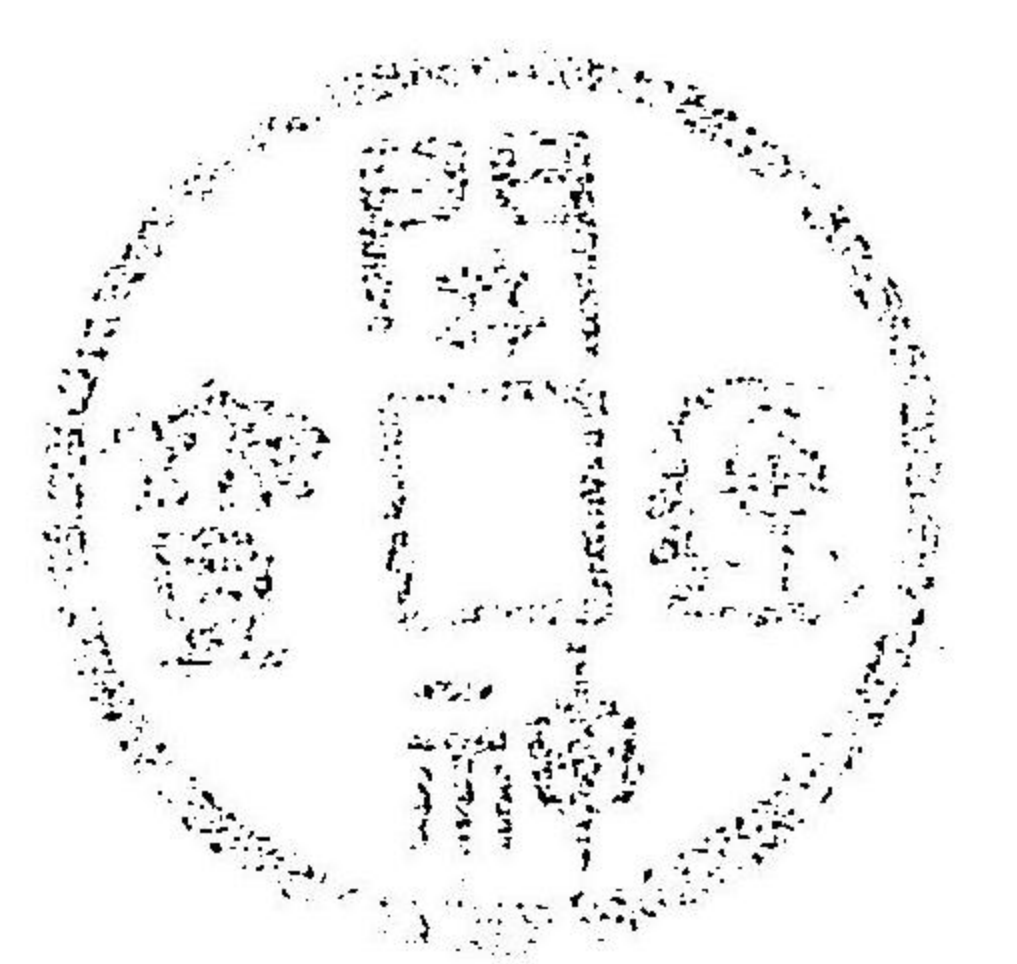
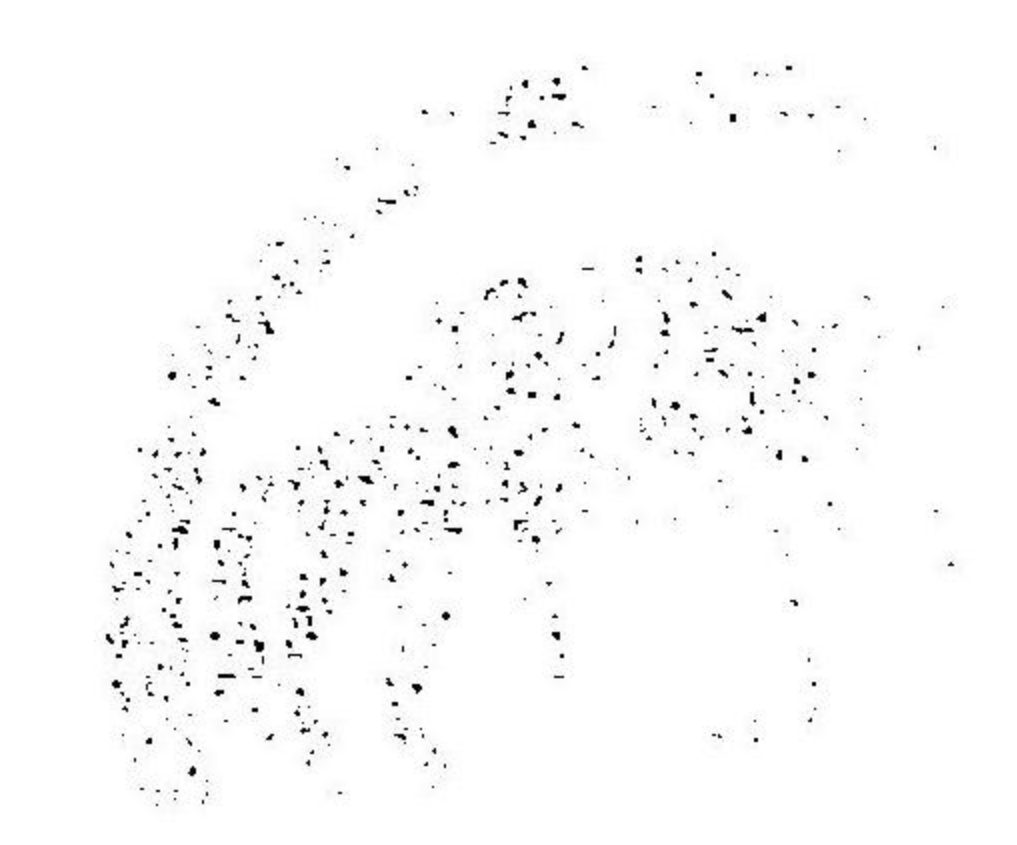
大澤の態度はすつかり變つて居た。彼が事業に臨む場合は、何時でも大資産家の物腰で、相手を呑んでかゝる調子である。眉と目の間に幅のない、鼻の尖つた、顎骨をピク／＼させる癖のある井上不二也は、大澤の容子を見てすつかり呑まれてしまった。

大澤は態と笑ひかけるやうに充分な愛嬌を見せて、

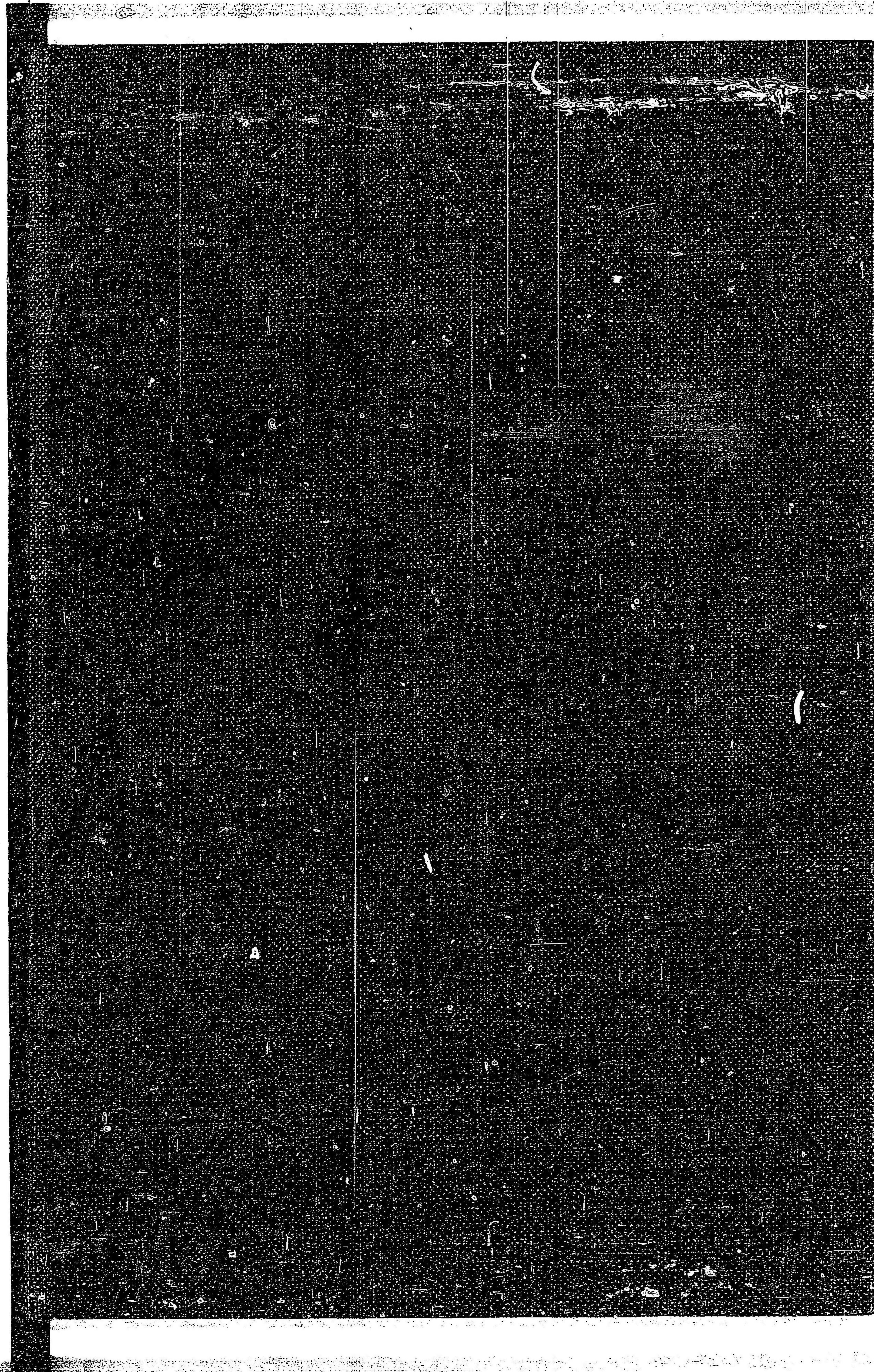
『貴方の發明された金銭登録器の特許権をお賣りにならうと云ふのですな』と口を切つた。



Handwritten text at the top right of the page, possibly a date or reference number.



終



338
10

6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 6

始



